

学位論文題名

青年層による発話表現の文法的特徴の研究

学位論文内容の要旨

本論文は現代(2000A.D. 頃)の日本語の談話文法の動態を見るために収集したデータ(テレビの談話番組『真剣10代しゃべり場』の文字化資料)に基づいて、2000A.D. 頃に文法を確立した世代の話し方の実態の一端を示したものである。

本論文は、1 文末表現と性差、2 「じゃん」「やん」、3 「って」の3 章と資料(放送発話文字化資料) からなり、総字数約20000である。

今回所用の資料は、『真剣10代しゃべり場』の第6期の第1回から第6回まで(2001年11~12月放送分) である。

【文末表現と性差】

文末表現の性差については、先行研究によって提示された「用言文(=男性性)」と「体言文(=女性性)」 とに分けて分析する方法がとられている。

先行研究のフィクションの科白を資料とした「観念的な性差」では性差が明瞭に認識される女性性用言文(行くわ。雨だわ。)と男性性体言文(雨か。雨さ。)がかなり見られたが、今次の資料では、男女ともにその使用がほとんど見られなかった。

|          | 女性   | 男性   |
|----------|------|------|
| 用言文      | 41.6 | 52.2 |
| 体言文(か・さ) | 1.5  | 2.5  |
| 体言文      | 37.7 | 29.5 |
| 用言文(わ)   | 0.2  | 0.0  |
| です・ます    | 19.1 | 15.8 |

先行研究では、性差は「異性性の文を使うべきでない」という観念によっているとし、男性性指標を  $100 \times \text{用言文等} / (\text{用言文等} + \text{体言文等} + \text{丁寧文})$ 、女性性指標を  $100 \times \text{体言文等} / (\text{用言文等} + \text{体言文等})$  とし、フィクションの科白の平均値(メディア値)は

女性の科白    m/f: 20/75  
男性の科白    m/f: 76/05

であるが、今次の資料で平均値は

女性の発話    m/f: 42/47  
男性の発話    m/f: 52/35

であり、性差は明瞭ではない。ただし、個別に指標を算出すれば

| m 昇順 |   |       | f 降順 |   |                        |
|------|---|-------|------|---|------------------------|
| T-N  | f | 21/32 |      |   |                        |
| O-Y  | m | 25/74 | O-Y  | m | 25/74 「んじゃないの・と思うのね」多用 |
| T-K  | f | 36/61 | T-K  | f | 36/61                  |
| T-Yr | f | 37/56 | T-Yr | f | 37/56                  |
| T-Yk | f | 39/55 | T-Yk | f | 39/55                  |
| O-S  | m | 39/48 |      |   |                        |
| N-A  | m | 51/49 | N-A  | m | 51/49                  |
|      |   |       | O-S  | m | 39/48                  |
| K-Y  | f | 52/45 | K-Y  | f | 52/45                  |
| S-A  | f | 56/43 | S-A  | f | 56/43                  |
| T-M  | f | 57/43 | T-M  | f | 57/43                  |
| N-Z  | m | 57/35 | N-Z  | m | 57/35                  |
| Y-N  | m | 60/22 | T-N  | f | 21/32 です・ます多用          |
| K-H  | m | 67/26 | K-H  | m | 67/26                  |
|      |   |       | Y-N  | m | 60/22                  |
| K-M  | m | 73/04 |      |   |                        |
| Y-K  | m | 84/16 | Y-k  | m | 84/16                  |
|      |   |       | K-M  | m | 73/04                  |

となり、「異性性の文を多用しない」傾向は認められる。

### 【「じゃん」「やん」】

今次の資料によれば、「じゃん」「やん」は、ともに用言と体言を承ける。恐らく「だろう」「でしょう」の代替表現として使われ、「じゃん」「やん」自身は用言として働いている。上に来る語が異なるのは「ない(打消しの助動詞)+じゃん」と「ん(打消しの助動詞)+やん」で、「じゃん」「やん」の使用が地域性に由来することを示している。また「の(形式名詞)+やん」は見られるが、「の+じゃん」は例が無い。「やん」の後には「か」「ね」の終助詞が付く(「ん」で終わるため「よ」は付かない)が、「じゃんか」は使用が避けられているらしく、今次の資料では例がない。終助詞が付かないため「じゃん」自体が終助詞的に使われているとも言える。文末表現に「じゃん・やん」を使用する割合は、個人別には女性は5～50%、男性は0～51%、平均で女性15%、男性19%と、かなりの量であり、性差は認めがたい。

### 【って】

「って」(「て」とも)は助詞「と」と同じように働きながら、時として、自身が動詞のように働く語である。今次の資料では「って」の上に来るのは「と」と同様に多様である。後に来る語も「って言う」「って思う」「てか」と「と」と同様の承接が多いが、「って-こと」「って-人」のような連体形もかなりあり、少ないながら連用形「てって」もある(今回は仮定形「ってば」は例がなかった。)

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宮 澤 俊 雅

副 査 教 授 富 田 康 之

副 査 助 教 授 佐 藤 知 己

## 学 位 論 文 題 名

### 青年層による発話表現の文法的特徴の研究

本論文は現代(2000A.D.頃)の日本語の談話文法の動態を見るために収集したデータ(テレビの談話番組の文字化資料)に基づいて、2000A.D.頃に文法を確立した世代の話し方の実態の一端を示したものである。

一般に現代日本語の文法は書き言葉を中心にして行なわれているが、この書き言葉は、1880A.D.ころの言文一致運動期に、それまで900~1100A.D.以来使われていた書き言葉(漢文訓読文・和文・候文・和漢混淆文)を廃して、当時のしゃべり言葉を復古化して構築されたものであり、従ってそれを規範とする文法論では、往々にして現代のしゃべり言葉を「正しい日本語」ではなく、省略・訛りの激しい、ぞんざいで間違いの多い女子供の喋り方という文法外事項の元に説明し位置付ける傾向が強い。しかしながら言文一致運動以後既に1世紀を経て復古的な書き言葉と現代青少年のしゃべり言葉の間には既に300年の実年代差が生じており、しゃべり言葉自体の文法を省略・訛り・ぞんざい・間違い・女言葉という文法外事項で処理することはできなくなっている。

本論文は、現代日本語の「しゃべり言葉」の文法を知るための基礎資料となる相当量の発話資料を構築することを目的とし、現時点で、その階梯の一端を示すべく、特に、多くの文法研究者が、訛り・間違い・女言葉と見なして顧慮しないであろう「しゃべり言葉」の文法の若干のテーマを取り上げたものである。筆者は、発話資料として今次使用分の数倍の文字化を目指しており、完遂すれば特殊なテーマに限らず、当たり前のテーマ(例、「しゃべり言葉」文法の連用機能、連体機能、助詞・助動詞の承接、等)にも検証資料として有用であろう推測される。

本論文は発話資料によって現代日本語の記述文法を検証することの可能性を明らかにしており、今後、同様の研究が多く行われるようになるであろう端緒となっている。この意味で本論文は日本語の文法研究を進展させるものである。審査担当者は全員一致して杉山太子氏に博士(文学)の学位を授与するのが至当であるとの結論に達した。